

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520588

研究課題名(和文)アカデミック・ライティングを指導する大学院生チューターの指導実践と意識の変化

研究課題名(英文)Development of postgraduate tutors' practice and awareness of academic writing tutoring

研究代表者

太田 裕子(Ota, Yuko)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・准教授

研究者番号：50434353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アカデミック・ライティング指導に携わる大学院生チューター育成のあり方を考察するために、大学院生チューターの成長の実態を調査した。早稲田大学ライティング・センターを事例として、大学院生チューターの指導実践および意識の変化とその要因を調査した。その結果、大学院生チューターは、自身が文章を書く経験、書くことについて意識的、メタ的に学び議論する経験、指導実践、自身の実践知を省察し他のチューターと共有する経験を通して、成長していることが明らかになった。本研究から、実践の省察と共有を中核としたチューター研修や実践研究の意義が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at illustrating postgraduate students' development as writing tutors, in order to investigate how postgraduate tutors' development can be enhanced further. By focusing on the case of Waseda University Writing Center, one of the first writing centers established in Japan, the project analyzed postgraduate tutors' development in their awareness and practice of tutoring, as well as factors that influenced such development. The results showed that the development of postgraduate tutors happened through experiences such as practicing, learning and discussing about writing, tutoring, reflecting on and sharing their practical knowledge with other tutors. These results indicate that tutor training and independent research by tutors are effective if emphasis is placed on reflection and sharing of tutors' practice.

研究分野：日本語教育

キーワード：ライティング・センター チューターの成長 アカデミック・ライティング教育 学習環境 研修 実践の省察と共有

1. 研究開始当初の背景

ライティング・センターは、1970年代に米国の大学で発足したライティングの支援機関である。ライティング・センターは1980年代に全米に広まり、現在は欧州や豪州、アジアの一部の国々で一般的になりつつある。日本においては、2004年に、早稲田大学を含む少数の大学で設置され、その後広がりを見せている。日本国内でライティング・センターを設置する大学は、今後ますます増加すると予測される。

日本のライティング・センターでは、大学院生がチューターを務める場合が多い(例えば早稲田大学、東京大学、上智大学、麗澤大学)。また、日本のライティング・センターで扱う言語は日本語または英語であり、英語のみを扱う米国とは異なっている。特に早稲田大学ライティング・センターでは、日本語学習者、日本語母語話者、英語学習者、英語母語話者、中国語話者、タイ語話者を対象に、日本語、英語文章を検討する独自の取り組みを行っている。

ライティング・センターの基本理念は、書かれた文章自体ではなく「書き手を育てる」ことにある(North, 1984)。つまり、「自立した書き手」を育てることを目標とする。そこで、チューターは添削をするのではなく、対話を通して書き手自身が文章の問題点と修正法に気付くよう指導をする。そのため、チューターには次のような指導技能が求められる。例えば、一人一人の書き手のニーズと持ち込まれた文章に合わせ、柔軟に指導を行う。その際、単に文章の問題を指摘し、修正案を示すのではなく、書き手自身が文章の問題や修正の仕方に気づくよう、質問や指摘の仕方を工夫する。このような非常に高度な指導技能は短期間で身につくものではない。研修への参加や指導実践を重ねる過程で、向上させていくのである。そのため、大学院生チューターの育成が、ライティング・センター運営における最も重要な課題といえる。

大学院生チューターの育成のあり方を考えるためには、彼らの成長とその要因を明らかにすることが必要である。なぜなら、大学院生チューターがどのような過程を経て、どのように指導技能を向上させているかを明らかにすることによって、大学院生チューターに対する効果的な育成のあり方を検討できるからである。しかし、チューターに対する研修のあり方に関する先行研究(例えばBell, 2001)は存在するものの、チューターの成長に着目した実証研究は、日本国内はもとより、アメリカにおいても見られない。日本のライティング・センターに関する先行研究は、多くが運営や実践の報告であり、指導実践を調査した実証研究も非常に数少ない(例えば佐渡島 2006、佐渡島・志村・太田 2008)。

日本の大学にライティング・センターが普及しつつある現在、チューターの成長過程を

明らかにすることは重要な課題である。そこで本研究は、大学院生チューターの成長とその要因を、指導実践と意識の変化に着目して分析する。

2. 研究の目的

本研究は、日本国内でいち早く設立され、大学院生チューターの育成に実績のある早稲田大学ライティング・センターを事例として、大学院生チューターの成長とその要因を、指導実践および意識の変化に着目して分析する。それによって、現在ライティング・センターを運営する、あるいは今後設立する大学に対し、アカデミック・ライティングを指導する大学院生チューター育成のあり方を示唆することを目的とする。また、大学院生チューターの、研究者あるいは教育者としての成長を明らかにすることによって、大学院生を活用したライティング・センターが、大学院生教育にどのように貢献しうるかを検討することを目的とする。

本研究は、次の三つの研究課題に答えることを目的とする。

(1) 大学院生チューターの意識とその変容過程 チューターは何に注目してアカデミック・ライティング指導実践を行っているのか。それは時間とともにどのように変化するのか。

(2) 大学院生チューターの指導実践とその変容過程 チューターはどのようにアカデミック・ライティング指導実践を行っているのか。それは時間とともにどのように変化するのか。

(3) 大学院生チューターの意識と指導実践が変容する要因 チューターの意識と指導実践が変容するのは、どのような要因によるのか。

これら三つの研究課題に答えることによって、ライティング・センターにおける大学院生チューター育成のあり方に関する示唆を得たい。また、アカデミック・ライティング指導に携わる経験の意味を、大学院生教育という視点から明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) 大学院生チューターの意識とその変容過程の分析

次のデータを収集し、チューターが指導実践において何に注目しているのか、それは指導経験の多寡や指導する状況によってどのように異なるのかを分析した。

新人研修ワークシート...新人チューターは、単独でセッションを担当する前に、先輩チューターのセッション観察(5回)と、先輩チューターの監督下でのセッション実施(5回)を行い、10編のワークシートに記入する。本研究では、7学期分、のべ109人分の新人研修ワークシートを収集した。そのうち、日本語文章を担当する新人チューター9名に焦点を当

て、彼らが直面する課題をコーディングした。
個人別態度構造 (Personal Attitude Construct: PAC) 分析 (内藤 1997) ...セッション中、チューターがどのような点に意識を向けているかを明らかにするために、PAC 分析を行った。11 名のチューター (日本語および英語チューター) を対象とした。以下の手順で分析を行った。連想刺激文は「よいセッションをするために、セッション中、あなたはどのようなことに注意を向けていますか。」とした。

(2) 大学院生チューターの指導実践とその変容過程

チューターはどのようにアカデミック・ライティング指導実践を行っているのか。それは時間とともにどのように変化するのかを明らかにするために、全チューターがセッションを任意に選び、来訪者の了承を得た上でセッション中の会話を録音し、業者に委託し文字化した。平成 24 年度から 26 年度までの 6 学期間、各学期一人 2 セッション分の音声データを文字化し、分析の対象とする (約 240 セッション分)。上記のデータをもとに、「チューターは、セッションにおいて、問題解決するために、どのような工夫を行っているか。」を明らかにすることを目的として分析を行った。

(3) 大学院生チューターの意識と指導実践が変容する要因

チューターの意識と指導実践が変容するのは、どのような要因によるのかを明らかにするために、次のデータを収集し、分析した。
学期末の振り返り記録...研修の一環として、各学期末にチューターは自分自身の成長を振り返り記述している。本研究では過去 7 学期分、のべ 109 人分の記録を分析した。
卒業するチューターによるプレゼンテーション記録...大学院を修了しチューターを辞める大学院生 (卒業チューター) は、学期末のミーティングで、後輩チューターに向けたプレゼンテーションを行う。その内容は、指導実践に関するコツや自分自身の成長である。卒業チューターが作成したシート、およびプレゼンテーションの音声文字化原稿を分析対象とする。6 学期分、のべ 29 人分の記録を収集し、分析した。
卒業チューターへのインタビュー記録...新人時代から卒業までの期間を振り返り、自分がどのような点において成長したか、どのような経験や出来事によって成長したかを卒業チューターに語ってもらった。インタビューは録音し文字化した。10 名分、各平均 50 分を分析した。
現役チューターへのライフストーリー・インタビュー...チュータリングの経験と

その意味を、大学院生チューターのライフ全体に位置づけ、考察するために、ライフストーリー・インタビューを行った。5 名の日本語チューターに対し、平均 60 分のインタビューを行った。
チューター自身による新人研修・チューター経験全体の振り返りと共有...有志のチューター 2 名と協働研究を行った。具体的には、チューターとしての自身の成長の軌跡である「チューター史」作成、ラウンドテーブルでの共有と話し合い、ラウンドテーブルの成果に関する発表という、一連の実践研究の過程が、チューター個人および実践共同体にとってどのような意義を持つかを考察した。

4. 研究成果

(1) 大学院生チューターの意識とその変容過程

新人研修ワークシートの分析

新人チューターが直面する課題を明らかにするために、日本語チューター 9 名の新人研修ワークシートを分析した。その結果、新人チューターは、書き手主体の文章作成を実現する対話やセッションの構成など、チューターの働きかけに意識を向けていたが、書き手の視点や、理念を実践するための具体的な方策にはあまり意識を向けていないことが明らかになった。(雑誌論文)

PAC 分析

セッション中、チューターがどのような点に意識を向けているかを明らかにするために、PAC 分析を行った。

ベテランおよび中堅日本語チューター 2 名の比較では、両者が書き手とのやりとり、セッション全体、文章に関わる要素に注意を向けていることがわかった。(雑誌論文)

新米とベテランの日本語チューター各 4 名を比較した結果、書き手の主体性を尊重し、対等な関係を築くことを重視していた点、対話に関する工夫や配慮に数多く言及していた点は、共通していた。一方、ベテランが書き手の観察、および書き手に合わせた働きかけに数多く言及していたのに対し、新人は全く言及していなかった。(学会発表)

母語の異なる英語チューター 3 名を比較した結果、書き手の言語・文章力、状況をよく観察し、それに合わせた働きかけを心掛けている点が共通していた。一方、日本語母語話者チューターは書き手の考えを引き出すための工夫に言及したが、他の 2 名は言及しなかった。また、ベンガル語母語話者チューターは自身の英語力に対する書き手の評価や期待に言及したが、他の 2 名は言及しなかった。これらの結果から、英語チューターの意識は、書き手のレベルや状況、期待によって大きく影響を受けていることが分かった。(学会発表)

(2) 大学院生チューターの指導実践とその

変容過程

セッション音声文字化原稿をデータとし、チューターと書き手は、どのような点について(トピック)、何をしているか(行為)に着目した。つまり、トピック(書き手・チューターが話している対象、話題)、行為(発話の機能、非言語行動)に着目して、発話にコーディングを行った。コーダーは現役チューター8名(英語5名、日本語3名)である。コードは、帰納的に生成したものをコーダー間で共有、吟味し、確定した。トピック 32コード、機能 49コードが生成された。分析されたセッション数は、英語 47、日本語 20である。

今後は、コーディング結果をもとに、新人とベテランの比較、日本語チューターと英語チューターの比較、および、個々のチューターの経年比較を行い、大学院生チューターの指導実践とその変容過程を明らかにしていく予定である。分析結果は論文や学会での口頭発表の形で公表する予定である。

(3) 大学院生チューターの意識と指導実践が変容する要因

大学院生チューターの学びと成長

大学院生チューターが、アカデミック・ライティングを指導する経験から何をどのように学んでいるかを明らかにするために、学期末の振り返り記録、卒業するチューターによるプレゼンテーション記録、卒業チューターへのインタビュー記録の質的分析を行った。その結果、チューターが様々な姿勢や技能を学んでいたことが明らかになった。チューターは、より書き手に沿い、自立を促す対話をし、一緒に考える姿勢を学んでいた。的確な質問や診断、指導に優先順位をつけるなど、指導力一般に通じる意識も芽生えていた。また、指導観の変容や他者との関係の認識の変容には、チューターたちがライティング指導を通して人としても磨かれている様子が表れていた。こうした成長は、研修と実践の往復、実践と研究の往復、書き手と支援者との往復、他チューターとの関係から重層的に起きていと語られていた。(雑誌論文)

チューターのライフストーリー

言語や教育を専門としない大学院生のライフストーリーから、書くことを学び指導する経験がどのような意味を持つかを考察した。書くことを学び指導する経験は、大学院生の学術的および私的なコミュニケーション実践、生き方やアイデンティティと深く関わっていた。また、大学院生は、コミュニケーションについてのメタ的な学びとコミュニケーション実践を通して、書き手主体の文章作成指導という専門性を身につけていた。(雑誌論文、学会発表)

チューターとの実践研究

チュートリング実践を省察し他者と共有する実践研究の意義を考察することを目的として、ライティング・センターのチュート

ーとしての個人史(以下、「チューター史」)を省察し共有する実践研究を行った。本稿では、実践研究がチューター個人、およびライティング・センターという実践共同体にとってどのような意義があるかを考察した。その結果、「チューター史」を省察し共有する実践研究は、チューター個人にとって、自分の実践知を省察し、拡充し、実践共同体のより熟達した成員としてのアイデンティティを形成し、実践を捉える視野を広げる手段として、意義があった。また、実践共同体にとって実践研究は、チューターの実践知を蓄積し継承し、実践共同体としての実践を発展させ、学び合う関係を構築し、チューターの学びに影響を与える実践共同体の制度や環境を省察する手段として、意義があった。このことから、実践研究は、学び合う実践共同体を構築する方法として有効であることが示唆された。(雑誌論文、学会発表)

(4) 研究成果から得られたチューター育成への示唆

本研究課題に関する一連の研究成果から、大学院生チューター育成のあり方、および、大学院生を活用したライティング・センターが、大学院生教育にどのように貢献しうるかについて、次の示唆が得られた。

大学院生チューター育成のあり方への示唆

研究成果から、アカデミック・ライティングを指導する大学院生の学びは、「書き方」や「教え方」に関する専門知識を得ることよりも、書く、議論する、書き手に対する指導実践といったコミュニケーション実践そのものから起きていることが明らかになった。(雑誌論文) また、チューターの意識と実践の変容に影響を与える要因として、他のチューターの多様な実践知、ライティング・センター以外の場での経験と実践知、自身の実践知に対する他者からの問いかけが挙げられた。大学院生チューターの学びを促す実践や要因は、次のような場が保障されることによってもたらされていた。(雑誌論文)

1. 大学院での文章作成授業：自由な議論を促進する場
2. 研修：書き手の主体性を重視した指導理念を意識する場、互いの実践経験や実践知を意識化し、共有する場、暗黙の前提を問い直し、意識化する場
3. 指導者同士の交流の場：互いの実践経験や実践知を語り合い、助言し合う場、対等な関係のもと学び合うことが奨励される場
4. ベテラン指導者が後輩指導者を育てる仕組み：人を育てることについて学ぶ、個人の実践知を共有し継承する仕組み

これらは、書くことや対話のあり方、指導のあり方といったコミュニケーションを意識的、メタ的に学び、実践する場や機会といえる。同時に、意識化されていない実践知や実践観を意識化し、他者と共有する場でもある。

このような学びの場が、指導実践を行う場と共に用意された環境において、大学院生の学びは活性化されていたのである。

1の授業履修を終え、アカデミック・ライティング指導に携わる大学院生チューターが、継続的に成長し、さらに実践知を次の世代に継承していくために、2、3、4において、互いに学び合う実践共同体をいかに構築するかが、ライティング・センター運営者にとって、重要な課題である。本研究では、互いに学び合う実践共同体を構築するうえで、自身の実践経験と実践知の省察と他者との共有を中核としたチューター研修や実践研究の意義が示唆された。

この示唆を踏まえ、本研究グループは、実践経験と実践知の省察と共有を中核としたチューター研修を実践している。

第一の実践例...チューターが書き手として、他のチューターの指導を受ける。その後、別のチューターとペアになり、他のチューターのセッションを受けた経験を振り返り、自身の実践知を意識化し、共有する。また、自身の実践知や実践観に影響を与えている要因を省察し、互いに共有する。

第二の実践例...「自立した書き手を育てる」といった、ライティング・センターで共有されている理念が、個々のチューターにとってどのように理解されているのか、指導実践の中でどのように具現化されているのかを共有し、その差異や共通点を議論する。

第三の実践例...指導実践に関わる個別のテーマに関する研修において、毎回、グループや全体で、互いの実践の工夫やその理由等を共有する時間を設ける。

第四の実践例...セッション音声文字化原稿をグループで読み合い、互いの実践の特徴やその効果等を議論する。

第五の実践例...研修の一環として、グループで、指導実践に関する自由研究を行う。

こうした研修の実践事例が、チューター個人およびライティング・センターにとってどのような意義があるかを検討し、その結果を公表することは、今後の課題である。

大学院生教育への示唆

大学院生チューターの成長を明らかにする本研究の結果、アカデミック・ライティングを指導する経験や、チューター育成のあり方は、大学院生教育において、次のような意義を示唆している。

本研究から、言語や教育を専門としない大学院生にとって、アカデミック・ライティングを学び、指導する経験は、次のような意味を持っていた。第一に、専門分野におけるアカデミックなコミュニケーション実践と相互補完的である。第二に、私的なコミュニケーション実践にも影響を与える。第三に、アイデンティティや過去・現在・未来の生き方に深く関わる。

このことは、大学院生の学びが、立場（学

習者／指導者／指導者を指導する者）、空間（授業／指導の場／専門領域／私生活／職場）、時間（過去／現在／未来）の境界を越えて起きていることを示唆している。大学院生は、自身が書くことを学び実践する学習者であると同時に、書き手に対する指導者である。ベテランになれば後輩指導者に対する指導者にもなる。また、書くこと、その学び、指導は、文章作成授業や指導の場だけでなく、大学院生の専門領域、私生活、職場でのコミュニケーション実践と関わっていた。そして、現在の指導観やコミュニケーション実践は、子ども時代や学部時代という過去からの志向や経験に強く影響を受け、未来の進路選択や生き方に対しても影響を与えていた。（雑誌論文）

以上から、アカデミック・ライティング指導に携わる経験を通じた大学院生の成長は、アカデミック・ライティング・スキルの向上や指導方法の学びといった範囲に限定されるのではなく、大学院生のライフ（生活、人生）全体における全人的成長に寄与していることが示唆される。大学院生をアカデミック・ライティング指導者として活用するライティング・センターが、大学院生教育という面において、重要な役割を担うと言えよう。

引用文献

- 佐渡島紗織（2006）「早稲田大学国際教養学部に発足したライティング・センターの運営と指導」『早稲田大学国語教育研究』26、82-94
- 佐渡島紗織・志村美加・太田裕子（2008）「日本語母語話者が日本語で英語文章を検討するセッションの有効性 書き手を育てるライティング・センターでの対話」『Waseda Global Forum』5、57-71.
- 内藤哲雄（1997）「PAC分析の適用範囲と実施法」『信州大学人文学部人文科学論集<人間情報学科編>』31、51-87.
- Bell, J.(2001). Tutor training and reflection on practice. *The Writing Center Journal*, 21(2), 79-98.
- North, S. (1984). The idea of a writing center. *College English*, 46, 433-446.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- 太田裕子（2015）「書くことを学び指導する経験の意味 大学院生のライフストーリー」『言語文化教育研究会第2回研究集会 in 金沢報告集』1-10、（査読無）<http://alce.jp/meeting/meeting02rep.pdf>
- 太田裕子・可児愛美・久本峻平（2014）「『チューター史』を振り返り語り合う実

実践研究の意義 学び合う実践共同体構築
に向けて」『言語文化教育研究』12、4
2-87 (査読有) <http://alce.jp/journal/dat/v12i.pdf>

— 佐渡島紗織・太田裕子 (2014) 「文章チュ
ータリングに携わる大学院生チュ
ータの学びと成長 早稲田大学ライティ
ング・センターでの事例」『国語科教育』
75、64-71 (査読有) <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009816886>

— 太田裕子・ Doyle綾子・坂本麻裕子・佐
渡島紗織 (2013) 「ライティング・セン
ターにおける新人チューターの課題 新人
研修ワークシートの内容分析」『アカデ
ミック・ジャパニーズ・ジャーナル』5、
1-10 (査読無) http://academicjapanese.jp/dl/ajj/AJJ5_1-10.pdf

— 太田裕子・佐渡島紗織 (2013) 「『自立し
た書き手』を育成するライティング・セン
ターのチューター研修とチューターの
意識 早稲田大学における実践事例とPA
C分析」『Waseda Global Forum』9、23
7-277 (査読有) <http://hdl.handle.net/2065/39713>

〔学会発表〕(計4件)

太田裕子 (2015年6月21日) 「書くこと
を学び指導する経験の意味 大学院生の
ライフストーリー」言語文化教育研究
学会第2回研究集会 in 金沢、石川県政記
念しいのき迎賓館

可児愛美・久本峻平・太田裕子 (2014年
3月8日) 「チューター史作成を用いた振
り返りの有効性」The Sixth Symposium on
Writing Centers in Asia、桜美林大学

太田裕子・佐渡島紗織 (2013年6月1日
~2日) 「ライティング・センターで文章
作成支援を行うチューターの意識 ベテ
ランと新人の比較」第35回大学教育学
会、東北大学

太田裕子 (2013年4月20日) 「英語担当
チューターはセッション中何に意識を向
けているか 母語が異なる三名の PAC 分
析」The Fifth symposium on Writing
Centers in Asia、政策研究大学院大学

〔図書〕(計2件)

- 佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄編
(2015) 『レポート・論文をさらによくす
る「書き直し」ガイド 大学生・大学院
生のための自己点検法 29』大修館書店
- 佐渡島紗織・太田裕子編 (2013) 『文章チ
ュータリングの理念と実践 早稲田大学
ライティング・センターの取り組み』
ひつじ書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 裕子 (OTA, Yuko)
早稲田大学・グローバルエデュケーション

センター・准教授
研究者番号：50434353

(2) 研究分担者

佐渡島 紗織 (SADOSHIMA, Saori)
早稲田大学・国際教養学術院・教授
研究者番号：20350423

坂本 麻裕子 (SAKAMOTO, Mayuko)
早稲田大学・グローバルエデュケーション
センター・助教
研究者番号：40648317
(25年~28年)

大野 真澄 (ONO, Masumi)
慶應義塾大学・法学部・専任講師
研究者番号：50704657
(25年~27年)

Doyle 綾子 (DOYLE, Ayako)
早稲田大学・グローバルエデュケーション
センター・助手
研究者番号：80595835
(24年~26年)

Boyd J. Patrick (BOYD, J. Patrick)
青山学院大学・国際政治経済学部・准教授
研究者番号：50449328
(24年~25年)

Tomimaga 敦子 (TOMINAGA, Atsuko)
公立ほこだて未来大学・メタ学習センタ
ー・准教授
研究者番号：60571958
(24年のみ)

澤 正輝 (SAWA, Masaki)
早稲田大学・オープン教育センター・助手
研究者番号：30608930
(24年のみ)